

現する中でどのように仏教と接触してゆくか、在地領主の氏寺の問題、荘園領主の荘園支配に仏教倫理がどうかみあうか、荘園体制下の都市の各階層と仏教とのかわり方、さらに聖や融通念仏など中世特有の隠遁遊行の背景などが述べられている。惜しむらくは何れも問題の指摘にとどまる簡略な記述であるが、本書のもっともユニークな部分をなすものであろう。また篤信の諸相、では、熊谷直実・阿仏房・証阿弥陀仏・足利直義・赤尾道宗と各宗、各派がからえらばれた五人がとりあげられている。

以上、甚だ少聞少見の紹介にて汗顔のいたりであるが、本書は、はじめに述べた通り、戦後の新しい仏教史の成果をふまえた学界待望の仏教史概説というべきであろう。ただ難点をあげれば、分担執筆者に、「中世」の認識の微妙なずれがみられること、学界の問題点をなまの形で提出するよりは各執筆者によって巧みに消化されすぎていることに気付く。参考文献や資料のあげ方が十分でないこととともに、初学者には必ずしも親切な概説とはいえないが、それらはむしろ本書の価値をそこなうほどのものではない。本書によって、仏教史の大きな問

題があらためて見定められることであろう。

〔古代篇〕（家永三郎監修）A5判三五六頁・文獻・索引一八頁 昭和四二年一月刊 定価一、八〇〇円 中世篇 五二六頁 文獻・索引三〇頁 昭和四二年五月刊 定価二、八〇〇円 近世近代篇〔圭室諒成監修〕近刊 法藏館発行（熱田 公）

藤井 駿
水野恭一郎 編著
谷口 澄夫

池田光政日記

岡山藩池田家旧蔵の古文書・記録類が岡山大学附属図書館に譲渡されて十七年、藩政の研究も大いに進んだが、そのいわば研究の中心であり文書の番人ともいふべき位置におられた三氏の手によって、藩主新太郎光政の日記が池田家所蔵の自筆本により公刊に附された。近世初頭の大名で自筆日記をのこしたものは極めて稀である上、その時期が寛永十四年から寛文九年におよぶ幕藩体制の確立期にあたり、「儒教的合理主義者」光政が独自の理念をもって藩政を

樹立しようとした時代であるから、編著者ならずとも「江戸時代初期の政治・経済・文化を理解する上に大いに役立つであろうと確信」される。われわれにとってよろこばしいのは、これが最も人を得たかたちで刊行されたことであろう。

内容は藩政の万般にわたっており、幕府当局との関係や、一門・親類・近隣諸藩との交渉、江戸参勤、年中諸行事から家臣団の統制、領内統治にいたるまで、読む者をしてあかせないが、なかでもこの日記の魅力は、それら諸事項にたいする光政の意見が明確に浮き出されていて、そこから彼の個性が強烈に匂ってくる点にある。光政の言行録としては『有斐録』などがあり、刊本にもなっていたが、いずれも後代の編纂にかかると正鵠を欠くうらみもあると思われた。伝聞など第三者の介在をゆるさぬ自筆日記は、この点でも一級の史料を提供しているわけである。寛永十九年から万治二年までの十八年間に家臣や領民に与えた教諭については、光政自身がとくに主なものを書いており、本書はこれを別巻としておさめている（したがってこの分は重複するものがある）。附録の池田光政自歴覚

は、みずからしるした略歴であり、これによって彼が藩政における何を自己の業績と認識していたかがわかる。幕藩体制社会の成立という歴史の一般的な進捗と、光政の個性とが織りなす綾のおもしろさが読者を魅きつける。

三人の老中をはじめ家中に修学を勧め、士道のあり方から百姓の治めようにいたるまで教諭を加える光政は、きわめて専制的・権威的である。彼と重臣たちとのやりとり、熊沢蕃山にたいする批評なども興味深い。一方で、軍法・軍役の整備、家中借銀の処理、承応三年の飢饉を機とした知行制度の改革、農政の徹底、新田開発、賈銀対策、などの社会経済問題、それに岡山藩独自の寺社政策、キリシタン神道諸制度等にかんする史料も豊富である。

史料という点からいえば、従来これらの事項にかんする史料は『法令集』（『藩法集1岡山藩』所収）によってみることができた。しかし、『法令集』は近世後期の編纂になり、部類別に分けているので、全体を通観したり、問題別にみるときは便利だが、藩政成立のこの時期を横断的にとらえ、同時代的な関連を把握しようとするためには

若干不便な点もあった。本書は、この点を十分に補なうことができる。のみならず、『法令集』がかなり年代を経た後の編纂物であるというところから避けることのできない誤写や虫喰いの害を持っているのになし、『日記』はその本来の正しい姿を研究者に示してくれている。いちいち例を挙げる余裕はないけれども、たとえば明暦元年正月二日の家臣への教令や、同月廿一日の郡中法令は、『法令集』に校訂の余地あることを示している。そういった意味でも、研究者には有難い本である。

欲をいえばきりはないが、傍註の基準がはつきりせず、もう少し多く打って頂けたらと思うのと、やはり頭註だけでなく索引がほしかった。なお、巻末に「池田光政年譜」が附されている。

(A5判 本文六六七頁 図版四頁 昭和四二年三月 山陽図書出版株式会社発行 定価 二五〇〇円) (朝尾直弘)